



Analytical Sciences 誌： 生成 AI 時代における 投稿・査読の現場から

齋 藤 伸 吾

Analytical Sciences (Anal. Sci.) 誌で副編集委員長を拝命している齋藤伸吾です。現在、九州大学の加地範匡編集委員長、茨城大学の山口央副編集委員長、31名の編集委員、海外編集委員21名の先生方と編集にあたっております。本誌は日本分析化学会の基幹欧文誌として Springer Nature (SN) 社より出版され、近年のインパクトファクターは2前後で推移しています。2025年の投稿数は853報に達し、4年で1.5倍以上となりました。一方で採択率は15%程度に留まっており、量的な広がりや質向上へつなげることが課題です。日本からの投稿数はインド、中国に次ぐ三番目ですが、採択率は比較的高く、国内の優れた成果を世界へ届ける場として、ご活用いただきたいと思います。

さて、順調に見える一方で、編集委員会では生成AI(人工知能)の話題がしばしば上がります。投稿論文の文章や図にAIの関与を疑う場面もあり、どこまでを許容し、どこからを問題とするかは、編集現場でも適切な解を探している段階です。ここでSN社の方針(本稿執筆時点2026年6月6日)を要約すると、(1)人間が作成した文章の文法・表現・可読性の改善に限るAI使用は申告不要、ただし、(2)内容生成を含む利用は適切な記載が必要、となっています。文章改善については、英語を母語としない我々が恩恵を受ける可能性もあります。(3)生成AI画像は原則使用できないことも重要です。特に重要なのは、(4)大規模言語モデル(LLM)は著者とは認められず、最終原稿への責任は人間の著者が負う、という点です。さらに、(5)査読では未公開原稿を生成AIに入力しないこと、またAIツールの支援を受けた場合は査読報告書で申告することが求められています。正確なポリシーはSN社のサイト(<https://link.springer.com/brands/springer/journal-policies>)をご参照ください。

将来に目を移すと、単にAIを排除するのでは、この劇的な変化には対応できません。多くの場合、新しい技術は古い技術を完全に淘汰するのではなく、組み込まれる形で社会実装されるように見えます。生成AIは既存の情報空間の組み合わせと探索を得手とします。一方で、何を問題とし、どの現象に違和感を覚え、どのような新しい軸(次元)を持ち込むかを決めるのは、今なお研究者に委ねられています。A. Einsteinは“*There is no logical path to these laws; only intuition, resting on sympathetic understanding of experience, can reach them*”と述べていますが、研究の核心には、経験に根差した洞察と直観があります。AIを用いながらも、直観と責任を手放さないことが将来の科学研究の鍵となると考えます。Anal. Sci. 誌もまた、その姿勢を読者、著者、査読者の皆様とともに考えていきたいと思います。

[Saito Shingo, 埼玉大学大学院理工学研究科,

「Analytical Sciences」副編集委員長]